

研究報告

高齢者介護の意味づけと家族介護者の支え方

ジェイソン・デーナリ (オックスフォード・ブルックス大学准教授) + カール・ベッカー (こころの未来研究センター教授)
Jason Allen DANELY *Carl BECKER*

*デーナリ先生は、2013年8月から2014年7月まで、こころの未来研究センターの共同研究員として、京都の老人福祉問題についてインタビュー調査を行ってきた。高齢者から聞き取ることができた多くの情報はまだ整理・分析・出版にいたらないが、本稿はその背景や関心事を紹介するものである。

社会的背景

人は誰も老いて、からだが衰え、今までは1人で簡単にできた趣味や日常のこともうまできなくなるのは、自然の摂理である。そして、親族、配偶者、同年齢の人、周りの人がだんだんといなくなってゆくと、自らの老後への不安感が次第に大きくなってゆく。もし介護が必要になってくると、誰が自分の世話をしてくれるのだろうか？ ある90歳の方が「寄らば大樹の陰」と答えてくれた。どうせ頼るなら、大きくて力のあるものに頼ったほうが安心できるという意味の言葉である。その「力」を信頼して自分の身をゆだねるためには、要介護者と介護者とを結ぶ「つながり」が大切だと考える。

しかし、昨今の日本では、そのイメージがだんだんと崩れつつあるようである。20世紀後半にかけて、日本人の平均寿命は伸び続ける一方、深刻な少子化も進んでゆく。3世代世帯が急速に減り、核家族や単身高齢者世帯が増えてきた。21世紀に入った今、将来におけるさらなる少子高齢化は、日本の運命を大きく揺さぶることは間違いないであろう。日本の高齢者は家族による介護を頼ることができないような状況に追い込まれていったのである。

この状況に対して、2000年から介護保険制度が施行された。しかし制度と現場のギャップが大きすぎて、「先行き不安」とよく言われる。多くの高齢者が、福祉サービスの恩恵を受けているし、上質な介護サービ

スを提供しようと努力を惜しまない介護職の人々も数多くいる。世界の他の国々と比べても、日本の福祉政策は充実しており、介護施設の数も種類も豊富である。福祉制度の利用者が多いわりには、国家予算への負担も比較的低いという報告もある。日本女性の平均寿命は28年間連続して世界1、現在、90歳近くなった。2010年度国勢調査によれば、子どもと同居している高齢者の割合は41%と、他の先進国に比べてもきわめて高い。しかし、介護者や高齢者に直接話を聞くと、不満を抱えている人が圧倒的に多い。その背景を考えてみたい。

1 施設化されたケアの問題

介護現場の労働者にたずねると、いくら「やりがい」のある仕事であっても、「時給が安い上に、ストレスや肉体的疲労など労働環境が劣悪で長く仕事を続けられない」というような答えが多く返ってくる。日本の介護職員の1割以上にうつ病の症状がみられ、働き始めて3年以内に64%が辞めていく。人材不足のため、専門知識が低い労働者を雇わざるを得ない。福祉大学に進み、介護の仕事を目指す学生たちも、厳しい現場の環境を実習などで体験し、やる気が萎えていくという話もよく聞く。せっかく人の手助けをしたいという気持ちで福祉の道を志しても、知れば知るほど魅力が薄れていってしまうのである。

介護サービスの利用者からも疑問の声が挙がっている。複雑な管理の

網にがんじがらめにされているように感じ、ニーズにあった介護を与えられなかったり、必要でないサービスを押し付けられたり、必要なサービスなのに使えなかったりという事例が目立つ。医療機関や保健センター、ケアマネジャーや訪問ヘルパー等が、縦割りの管理体制に組み込まれているので、相互的な協力が得られにくい。介護専門職のなかにも、市場主義の用語を使うようになってしまった人もいる。「利用者」が「お客さん」になり、ケアマネジャーが「営業マン」、ホームやデイサービスでも「ビジネス」と呼ぶ人もいる。

家族に世話をしてもらいたいと望む高齢者が多いことは当然であるのに対し、元気で自立している高齢者は、子どもに「迷惑をかけたくない」という遠慮もある。しかし本音は老人施設に入所するより、信頼できる家族にすがりたいであろう。家族による介護が、超高齢社会となった現代の日本を支える大きな役割を果たしていることは間違いない。

他方、介護サービスを利用しても、家族負担の解消にはつながっていないようにも見える。田宮等(2011)によると「多くの家族介護者は伝統的な家族価値観の中で具現されると期待されるものに左右されながらも、それから解放されたいと願っている」と説明している。さらに、「負担を感じつつも、一方では愛情や助けてあげたいという思い、他方では義務感や社会的圧力から介護を続けているのである。効果的な介護政策はこれらの感情を和らげはするが、完全になくしてしまうことはできない」と



介護者にインタビューするデーナリ研究員

議論している。こころの問題は合理的な道具で解決しようとしても限界がある。

2 「おかげさま」がこころの支え

日本の文化では、「おかげさま」という言葉は交流の価値を象徴する言葉である。その「かげ」の価値観は古くから語り伝えられ、日本の民話や、美意識の中でも散見される。ご先祖様が果たしてきた役割も「かげ」であり、日々の習慣の中に、その価値が根強く残っている。日本人の死生観の中にも「先祖のおかげでわれわれが生きている」という概念がさすがに強い。

筆者は、ある81歳の日本女性と出会い、介護についてお話をお聞きしたことがある。去年まで介護していた夫を亡くし、精神的に落ち込んでいた。2人の娘は嫁に行ってしまう、夫と2人で長く暮らしていたので、介護で何かと苦労したが、夫と幸せな時間を過ごすこともできたと言う。

「どうして介護を幸せに感じられたのですか？」と聞くと、「グランドキャニオンのおかげで」と、不思議な答えが返ってきた。実は10年前、まだ2人とも元気だったころ、アメリカに観光旅行し、グランドキャニ

オンへ行った。あの雄大な景色を眺め、感動した2人は、これから先の老後生活に対する不安や悩みを捨て、お互いを守り合いながら、前向きに生きていこうと誓ったのだそうである。夫に先立たれ、落ちこんだ気持ちから、立ち直って来られたのも、「パパとグランドキャニオンのおかげで、感謝しています」と涙ながらに語ってくれた。

3 介護者のこころを支える「場」と「語り」の創造

老人のニーズに合わせた介護プランを企画し、家族支援と地域支援を同時に行う小規模多機能施設が増えている。従来の施設のイメージと違い、「民家」を改造したりして、友人の家を訪れるような感覚で、近所の人も気軽に出入りできる空間を創り、高齢者が子どもや若い家族と触れ合える、魅力がある「場」が、これから増えるであろう。

京都では、禅宗の寺院が、「臨床僧侶」の活動を始めた。何人かの僧侶が介護職の資格を取り、悩む高齢者や家族の苦しみに向き合い、語り合うことができる「場」を作ろうと試みている。その活動の関係者によると、「人様と人様の縁をつないでい

くこと」がいちばん大事な展望なのだそうである。介護保険制度に縛られた福祉職員やケアマネジャーと違って、保険の利用者である高齢者はもとより、介護をする家族のこころを支える立ち位置から活動を展開して、よい成果をみせている。

合理性だけを追求する福祉政策では、日本の介護者の不満をとうてい解消できないが、「介護」を意味づけて「人間関係のシステム」という枠で捉え直すことができれば、状況を改善できる可能性も広がる。介護をする人々が平穏に安心して生きるためには、資源や情報は無論のこと、こころの支え、「語りのつなぎ目」が大切であり、その「つなぎ目」の向こう側では、あのグランドキャニオンの景色のような記憶、つまり、これまでの人間関係の絆が支えになるのではないだろうか。

参考文献

Tamiya, N., Noguchi, H., Nishi, A., Reich, M.R., Ikegami, N., Hashimoto, H., Campbell, J.C. (2011). "Population aging and wellbeing: lessons from Japan's long-term care insurance policy." *Lancet*, 378(9797), 1183-1192.
 Web: 臨床僧侶サーラ <http://www.rinshoso.net/>